

### 「北国の春」は遅い

ゴールデンウィーク初日の羽田空港は朝早くからごった返していました。手荷物検査場が混んでいて出発は30分以上遅れる始末。灰色の東京の空（普段から灰色だ！）を背に水平飛行にうつると、機長からの挨拶。「現地の天候はあいにくの雨模様、気温は摂氏3度との報告が入っております。」え！3度って東京の真冬じゃないか、防寒着持ってきてないよ。残念ながら予想は的中、帯広空港は雨降り。駅へ向かうバスから見える木々は緑の衣をまとうこともなく、まだ冬の装いでした。ニッポンは縦に長いなあ。

### ヒルのいる川は？

北海道の川の日ワークショップは昨年の札幌に続き、今回の帯広で2回目になります。昨年を振り返ってみるとNPOや市民以上に行政の方の発表に元気があったのが記憶にあります。冬が長く、川に行って活動できる時間が夏場に集中するということで今年は4月中（去年は7月）の開催になったそうです。これもまた地域性の表れとも言えるでしょう。

さて今年の北海道川の日ワークショップは全道より30チームが参加し、4月26、27日の2日間開催されました。初日は「子どもの水辺」「市民活動・企業」「行政」の3分科会に分かれて一次審査、二日目は各分科会より選ばれし全6チームによる二次審査と特別賞チームによる発表、表彰式がありました。

初日、私は「子どもの水辺」分科会を中心に楽しませて頂きました。10団体が参加したこの分科会、水辺の楽校、総合学習、安全講座、地域を巻き込んだ活動とバラエティに富んだ内容はどれも魅力的でした。そんな中で私が一番気になったのが小学校の先生が発表した、ウツベツ川「水辺の楽校」と総合学習のかかわり。全体会でも話題になっていたこの活動、小学校4年生の総合学習の時間に近くを流れるウツベツ川を対象に授業を行ったそうなのですが、はじめに自分たちで調べてわからないことがあったので川のプロを呼んで聞くことにした、とか、何でもいいのでウツベツ川のプロになるうとか新たなそしてユニークな視点がたくさんありました。でもそれ以上に子供達が「ヒル」に興味を示したということが印象的でした。当初、子供達は「ウツベツ川は汚くてなんにもいないだろう」と思っていたらしいのですが、いざ観察してみると「見たことのない伸び縮みする生き物がいる」ということでこれに大変な興味を示し始めたということなのです。これを聞いた河川管理者の方の苦笑いが私たち大人の気持ちを表しているような気がします。大人はヒルのいる川なんて近づこうとしないし、ヒルを見ただけで一歩引いてしまいます。調べてみようなんて思わない。子供達には川でもっと遊んでほしいけど、汚い川に入ってどんどん遊べというの



も気が引けるといふもの。「ヒルしかすめない川」も子供にとっては「ヒルみたいなおもしろい生き物がすんでいる川」なのかも知れません。これを発表していた若い（本人は若くないと言っていました）女性の先生、子供達にヒルを見せられたときどういう反応したのでしょうか？あの発表からすると「これ、血吸うんだよ」なんて言って逆に子供達を怖がらせていたような。

### 継続は力なり

特別賞を受賞の日崎さん。市内を流れる帯広川流域に住む日崎さんは、なんと40年間この川の写真を撮り続けて来たそうです。その間には洪水があって撮りためた写真が水浸しになってしまったり、毎週きまった曜日になると泡が上流から流れてきたりといういろいろなことがあったそうです。泡の原因は未だにわからないようなのですが、40年間の重みが言葉の端々から伝わってきて、続けていくことの重要性を改めて感じさせてくれた発表でした。



雪が溶けて川になって、どこに流れて行くの？

ワークショップ後のエクスカーションでは十勝川周辺をバスでまわりました。私が2月に十勝川に来たときには一面雪に覆われていてどこまでが川なのか、どこが高水敷がどうなっているのかわかりませんでした。雪が深く、車で行けないため途中から雪をかき分け、歩いて川を見に行ったのです。その同じ場所をバスがすいすい走っているのですから季節の移り変わりをつくづく感じるエクスカーションでした。

ゴールデンウィークがあけると7月の「川の日」ワークショップの準備が本格的に始まります。北海道はじめ各地から元気いっぱいの発表をお待ちしています。東京でお会いしましょう。

---